



行方昭夫名誉教授が寄稿した記事が掲載されました。

# 日本人に響く「諦観」

## サマセット・モーム 没後50年

寄稿 行方昭夫



なめかた・あきお 1931年東京生まれ。東京大学名誉教授、東洋学園大学名誉教授、日本モーム協会会長。著書に『英文快読術』『サマセット・モームを読む』など多数。近著に『英会話不要論』。

イギリスの作家サマセット・モームが今年、没後50年を迎える。この機会に日本における彼の過去と現在を探ってみよう。

昨秋、友人の紹介で、朗読や講演でお忙しい有馬稲子さんにお会いする機会があった。拙著『モームの謎』を差し出すと、「あ、モームね。懐かしいわ。宇野重吉先生に弟子入りして、最初に出た劇が、フォー・サービシス・レンドワードだったんですもの」と声を高めたのには驚いた。

『報いられたもの』という、民芸が1966年に上演した作品の名を、英語で即座に口にしたからだ。有馬さんの他にも、モームを覚えていた著名人は、少なくない。画家の安野光雅氏などは、愛読する小説『人間の絆』が身近にないと落ち着けないという。「天声人語」に時折顔を出すのはご存

### 人生の謎を追求 衰えぬ存在感

じの通り。昨年、喜劇『夫が多すぎて』が人気俳優出演で、日本各地で上演された。

小説の代表作『月と六ペンス』は、ここ数年で新訳が二種出た。「雨」「赤毛」などの短編は、新訳も75年前の歴史的な名訳も文庫で出ている。

代表作が容易に入手できるというのは、彼と同時期に大活躍していたウェルズ、ベネット、ゴールズワージーなどとの大きな違いだ。衰えたと書いても、まだ売れる作家なのだ。

後世での自分の人気について、モームはこう予想している。自分の若い頃、人気を誇っていた作家たちが没後、急速に忘れられたのだから、『人間の絆』も長すぎるので、敬遠されるだろう。ただ、運がよければ、英国喜劇の伝統に

沿った数点の喜劇と、エキゾチックな魅力があるというので、1ターズの短編とが、読み継がれるかもしれない、と。

70歳の時のこの予想は的中したが、もっと楽観してもよかったところだ。劇と短編だけでなく、代表的な小説もいまだによく読まれているからだ。受験時代を懐かしんで、随想録『サミング・アップ』まで愛読するファンもいる。

昔日の人気を知らない方のため、第2次大戦後から59年の日本訪問までの熱狂的なもて方を振り返ってみよう。新潮社から英米作家には珍しく全集が出、世界文学全集では大作家扱いされ、主要作品が全ての文庫に入った。入試に毎年出題され、英語テキストとして持て囃された。来日時には、彼を一目見ようと群がったファンの整理に警官が駆り出された。

人気の秘密は？ 巧みな物語の語り手であるだけでなく、人間・人生とは何か、という謎を一生追求したことが、文学から生き方を学ぼうと望む日本の読者の好みに合致したからである。『人間の絆』の主人公が苦難の末に到達する一種の東洋的な諦観の境地に共感を覚える人は多いだろう。この好みが続く限り、今後とも彼が忘れ去られることはなさそうである。



来日時に京都の三千院周辺を散策するサマセット・モーム(右)=1959年11月

■公演・新宿くまもと物語「わが青春のムーン・ルージュ」(東京都新宿区、熊本市など共催) 2月14日、新宿区四谷区民ホール。午前の部は11時、午後の部は3時開演。昭和の新宿、軽演劇の劇場「ムーン・ルージュ」を題材に、夏目漱石「三四郎」の主人公のように熊本から上京した若者たちの青春を描く。3千円。問い合わせは事務局(096・366・5151)。